

わたしたちは、毎週の聖書の箇所、特に福音書を通して、イエス様についてのイメージとか、ユダヤ人、特にファリサイ派へのイメージができあがっています。イエス様は温和でやさしい人だった、とか、ファリサイ派は、いつも律法に囚われて、イエス様のことを理解することができないで、古い考えに固執している、困った人たちだという先入観ができあがっているのです。

ところが、時々、そんな先入観とは違う聖書の言葉に出会うことがあって、ハッとさせられることがあります。そういう意味では、今日の福音書は、イエス様もファリサイ派も、わたしたちの先入観を覆すような言葉を語っています。

まずは、ファリサイ派ですが、イエス様がエルサレムの都への旅をしている途中で、イエス様に危険を知らせるように、この人たちが近づいてきて、「ここを立ち去ってください。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」と発言しています。

この言葉を語ったファリサイ派の目的は何だったのか、本当にイエス様の身を案じて言ったのか、心配をしているフリをして、この土地から出て行かせようとしているのか、見解の分かれるところです。

しかし、私たちが驚かせるのは、それに対するイエス様の言葉の方です。

「行って、あの狐に、『今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える』とわたしが言ったと伝えなさい。」

イエス様は、その土地の領主である、ヘロデのことを「あの狐」と呼んでいるのです。イエス様が、相手を批判するのに、時々ひどいたとえを使われることはありましたが、動物にたとえるのは今日の「あの狐」くらいだろうと思います。

ここで、少し『狐』という言葉について、話しておかなければなりません。ヘロデがキツネだ、とイエス様から言われるのは、ヘロデの性格の中に、キツネの性質があるということでしょう。

聖書の辞典などを見ますと、キツネというのは、陰険で狡猾な動物。まあ、悪賢い性格なのでしょうか。そして、群れで行動することではなくて、孤独に荒れ野で生活しているようです。そして、雅歌といわれる旧約聖書の歌の書物では、キツネがブドウ畑を荒らすことなどが出てきています。

悪賢いというのは、政治的に、自分の利害関係で他の人との付き合い方も変えるようなところがあるのでしょう。イエス様が十字架に架けられる裁判の時、ルカの23章ですが、こんなことが書かれています。

『10:祭司長たちと律法学者たちはそこにいて、イエスを激しく訴えた。11:ヘロデも自分の兵士たちと一緒にイエスをあざけり、侮辱したあげく、派手な衣を着せてピラトに送り返した。12:この日、ヘロデとピラトは仲がよくなった。それまでは互いに敵対していたのである。』

片や純粋なユダヤ人ではないイスラエルの地方領主と、片やローマ帝国のエルサレム総督。占領された側と、占領する側ですから、敵対関係にあるはずですが、共通の敵であるイエス様の存在で、お互いが仲良くなるというところはあるのでしょうか。

また、イエス様はご自身の孤独な立場を、キツネと関連して、話しておられる箇所もありました。

「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」(ルカ9：58)とされています。あの単独で寂しく荒野で生活している狐だって、ねぐらの穴があるのに、自分はもっと孤独だ、ということでしょう。

イエス様は自分の置かれた危険な立場から、そこに追い詰めた敵を「きつね」と言われたことについて、「こんな言い方はイエス様に相応しくない」と、簡単には批判できないのではないかと私は思います。人々は口に出せなくても、イエス様は勇気を持って、相手の陰険さ、狡猾さを批判されたと受け取っていいと思うのです。

イエス様の命を狙っているというヘロデですが、これは親子二代にわたってのことであることを、皆さんはご存知でしょう。今日のヘロデは、ガリラヤとペレヤの領主でしたが、その父親ヘロデ大王は、イスラエル全体の王として、イエス様が生まれた頃に国を支配していました。この人は、東の国の博士たちと出会い、自分の現在の地位を脅かす王様は殺さなければならないと、ベツレヘムの二歳以下の男の子を殺したのです。

この、イエス様に対する父親のヘロデの陰謀は、天使がエジプトへ逃げるように促すことで、避けることができました。しかし、息子のヘロデの方については、結局、エルサレムで十字架にかかることによって、実現しました。

でも、そうなることは、イエス様ご自身も承知していて、しばしばそうなることについては、予告しておられます。そしてイエス様はそのような危険な情報に屈することなく、現在の活動を続けながら、最終的には、このヘロデの領地ではなく、都のエルサレムまでの道を突き進み、かつての預言者たちが、エルサレムで死んで行ったように、暗にご自身もそこで最後を遂げることを語られているのです。

ちょっと話が外れますが、今から28年前、太田執事とイスラエルに行ったことがあります。エルサレムの東側にあるオリーブ山から歩いて降っていると、ハガイ、ゼカリヤ、マラキという旧約聖書の最後の三つの書物の名前になって残っている預言者たちの墓と言われるところがあることを発見しました。私はそれまで、3回イスラエルには行っていたのですが、その墓を知ったのは、4回目の時でした。

今日の福音書では、イエス様が「34:エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、」と嘆いたのは、エルサレムへ向かう途中の道での発言になっています。しかし、マタイによる福音書の方では、十字架にかけられる直前、エルサレムに入城して、大暴れし、学者たちと議論したあとで、ベタニアに引き上げる時、オリーブ山からエルサレムの町を振り返って言われた言葉として、出てきます。もし、マタイによる福音書の方が歴史的には正しいとしたら、イエス様は歴代の預言者たちの墓を見ながら、「エルサレム、エルサレム・・・」と言われたのでしょうか。

さてこの言葉を言う前に、イエス様はエルサレムの神殿で、怒りをあらわにして、人々を『強盗』と呼んでいる箇所があります。みなさんよくご存知でしょう。イエス様がエルサレムの町で逮捕されるきっかけになった、神殿での宮きよめの大暴れの行動ですが、その時には、境内で商売をしている人々に向かって、「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』／ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」と厳しく批判されています。

この強盗の巣という表現は、イエス様が初めて使われたのではなくて、エルサレムの最初の神殿が倒される前に、エレミヤに向かって、神様が語られたのが最初です。

エレミヤ書 7 章

『1:主からエレミヤに臨んだ言葉。

11:わたしの名によって呼ばれるこの神殿は、お前たちの目に強盗の巣窟と見えるのか。そのとおり。わたしにもそう見える、と主は言われる。』というのが最初です。

この、イエス様がヘロデ・アンテパスや神殿で商売をしている人々に大変強烈な言葉を言ったことを、大斎節中、私たちも同じように、自分に向けられた言葉だと受けとめる必要があろうと思います。

大斎節は、「大斎克己」という言葉もあるように、自分に打ち勝つことが求められているのです。それは、批判に耐える、寛容だけを身につけるということではないと思います。

今日の使徒書で、パウロは、神様のことより自分のことを大切にしまっている人々を批判しています。

フィリピの 3 章ですが、

『17:兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となちなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18:何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。19:彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。20:しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。』

私たちは、もう一度、自分たちの行動が神様に逆らい、自分自身の意思だけで行動していないか、反省したいと思います。

自分可愛さで、大きな力の前に黙ってしまうのではなく、時には勇気を持って、相手に響くように、多少刺激的ではあっても、イエス様が「きつね」とか「強盗」という言葉を使われて、はっきりご自分の気持ちを（と言うより、神様のご意思だと思いますが）相手に伝えられた、ということから学びたいと思います。

今日の特祷には、わたしたちの外側の災いや、内側の悪念を除くために、神様、力を与えてください、とお祈りしています。勇気を持って発言や行動がとれるように成長したいと思います。